

# 語彙における伝播の中心地と伝播の範囲による 方言分布成立過程の解釈の問題

——「方言四層」の補説・修正として——

安部清哉

キーワード：周囲分布、言語地理学、『日本言語地図』、方言四層、方言分布成立史、東西対立、伝播圏、伝播範囲、伝播時期、伝播の中心地

## 要旨

本稿は、拙論「方言四層」に対して、井上史雄氏、小林隆氏から提示されている疑問点・問題点を考慮して、東日本層の時期および古代全国層の中心地については修正を加え、そのほかのいくつかの点については拙論の視点からの解釈を述べてお答えし、また、一部には補足説明を加える。

修正によって、東日本層の成立時期を、現時点では少なくとも室町時代半ば頃まで遡るものとし、古代における伝播の中心地は、特定の一地域に限定されるものかどうか今後検討する必要があるとする。それによって、語彙の周囲分布によって方言分布を解釈する「方言四層」の視点はなお有効であることを述べる。なお、音韻上、また、文法上の問題に関わる方言分布の解釈は、語彙の場合とはまた別に解釈されるべきであると考ええる。

目次

はじめに

一、提示されている疑問点・問題点

二、伝播の中心地と伝播の時期とに関する問題

(1) 「東日本層」の時期についての修正

(2) 「近代全国層」の問題

(3) 古代における分布の問題

おわりに

三、室町時代の語例をめぐって

(1) ウブウ・オブウについて

(2) カリルについて

四、伝播の時期と伝播の範囲とに関する問題

はじめに

(1) 東日本層成立以後の東西間の伝播について

(2) 東日本層成立以前の東西間の伝播について

① 東西対立分布の語形について

② ①以外の語形について

(3) 海路(主に西日本から東日本への)による伝播について

(4) 小林氏の(d)のパターンに関連して

おわりに

はじめに

方言分布の解釈、あるいは、方言分布の成立過程に関して、一連の拙稿（参考文献参照）の中で述べてきた方言分布における四つの層の考えに<sup>補注(1)</sup>対して、井上史雄氏（井上一九九〇）、小林隆氏（小林一九九一）から、疑問点・問題点が提示された。特に、小林（一九九一）では、古代全国層等いくつかの点で御支持いただきながらも、拙論の「層」における伝播の時期の設定については、近代全国層以外は疑問ではないかと結論付けておられる。

本稿では、主に小林氏の疑問点を中心に取り上げて、拙論での考え方を充分理解していただくために、さらに説明を重ねる必要があると思われる点については説明を補足させていただき、また、小林氏が問題提起された事例を考慮して資料を検討し、安部（一九八八）の一部に修正を加えることにしたい。その修正によって、小林氏の疑問とされた問題点は、やはり四層の解釈の中で説明していくことが可能となると考える。

語彙の周囲分布によって方言分布の成立過程を考えていく上では、方言四層による解釈がなお有効であると考えられ、改めて、この方言四層の視点を提示して大方の御批判を乞いたく思う次第である。<sup>(1)</sup>

### 一、提示されている疑問点・問題点

井上史雄（一九九〇）、小林隆（一九九一）において、拙論「方言四層」の疑問点とされた種々の内容のうち、主要な点を、その性格に応じてわたくしなりの観点から便宜的に整理すると次のようにまとめられる。

- 1、拙論「方言四層」における層の成立時期に関して、文献例や方言分布に照らして、矛盾すると考えられるところ、あるいは、検討が必要と思われるところがあり、そのような部分に対して疑問であるとされた点（井上一九九〇、小林一九九一）。

2、おそらくは拙稿での説明の仕方に不十分なところがあったため、理解され難かったところがあったため、疑問を持たれたのではないかと思われる点（小林一九九一）。

3、拙論では課題として保留してきた音韻上の解釈の問題に関わって、方言分布成立史を考える上では、語彙における「方言四層」とは別に考慮しなければならぬと考えられる音韻上の背景をもつ事例について、語彙上の問題として疑問であるとされている点（小林一九九一）。

これらのうち、1については二（1）（2）で取り上げ、修正・検討を加え、2については四（1）（2）（3）などで補足説明を加えたいと考える。3については、当該事例の音韻的背景について、三（2）で一部触れるところがあるが、音韻上の問題に関わる分布の解釈として、機会を改めて取り上げさせていただくことにしたい。

右三点のほか、小林（一九九一）では、拙論での「古代全国層」の伝播の中心地に関する問題も指摘しておられ、それについては二（3）で取り上げる。

なお、小林（一九九一）において、拙論の解釈を問題として取り上げつつ、氏自身の解釈を示されているところにも、おうかがいしてみたいところもあるが、以下では内容が繁雑になることを避けるため、示された疑問点にお答えすることを中心にして進めたいと考える。

## 二、語彙における伝播の中心地と伝播の時期とに関する問題

### （1）「東日本層」の時期についての修正

まず、拙論に修正を加える必要があると思われる点について触れておきたい。

拙論では、東日本層の発達の時期を、種々の事例における東国文献での例と方言分布などから近世半ば以降と考え

た。それに対して、小林隆氏は、『日本言語地図』（以下、LAJ）で東日本に分布するウブウ（おんぶする）、カリル（借りる）、オツカナイ（恐ろしい）については、近世半ばを遡る東日本での文献例が確認されることからみて、東日本層の時期の設定については疑問であるとされた。<sup>(2)</sup>

これらに三語のうち、カリルについては、その誕生の背景として音韻上の問題があると考えられるので、語彙の周圏分布という点から考えられている東日本層の問題というより、まず音韻上の問題として解釈されるべきものと考えられる（三（2）参照）。オツカナイについては、その語源の解釈にもよるが、音韻的な問題などが考慮されるので、同様であると考ええる。この二語の位置付けについては、音韻上の問題の解釈として機会を改めて取り上げる予定である。

ウブウについては、『天正狂言本』の資料的地域性が現時点では必ずしも確定されないこと、及びウブウの当時（中世末）における地理的広がりについてもまだ資料が充分ではないことから、これによって直ちに成立時期を遡らせ得るかどうかは検討を要すると考える。

このうち、カリル・ウブウの二語については、後に詳しく取り上げて説明を加えたく思う。

ところで、ウブウに関しては、『天正狂言本』の東国資料としての可能性の高さが指摘されており、また、LAJにおけるウブウの分布をも考慮するなら、今後の調査によっては東日本層の時期を中世に遡らせる事例として、検討されるべき語形と思われる。それゆえ、そのような、小林氏によって提示されたウブウの問題を考慮し、近世を遡るような東日本層の事例を改めて調査検討する必要があると思われる。

その結果、現在のところ、ウブウの事例よりも古く、地理的な広がりにおいてもより広範囲での分布が推定される語形として、カンダチ（雷・雷雨）を確認するに至った。この事例をもって、東日本層の時期を少なくとも室町半ば頃に遡ることを検討したいと考える。（この修正については、安部（一九九三予定稿）において結論のみ簡単に触れている。）

以下、カンダチの分布と文献例について述べることにする。

LAJの255図「雷」と256図「夕立雨」の地図におけるカンダチは、関東から東北地方太平洋側にかけての地域の周辺部に分布し、東日本にのみ分布するものであることがわかる。

文献におけるカンダチの古い例については、迫野虔徳（一九七〇・一九八二）でその報告がある。

その後者、迫野（一九八二）によれば、天正二（一五七四）年の『伊達輝宗日記』にカダチ（「かたち」という語形で、カンダチ（神立）の例が見られ、雷雨、あるいはまた、雷から雷雨までの広い意味をもって使われていたものであると推定されている。また、この語は『梅津政景日記』にも見られ（「かたち」）、カンダチは雷、カンダチアメは雷雨の意味で使われているとされる。迫野氏は、梅津政景（一五八一～一六三三）について、生まれ下野、後に常陸に移り、仕えた佐竹氏が常陸から秋田に慶長七（一六〇二）年に移封されたのに従っているので、言語の大体は常陸のもと考えられるが、語彙の面では検討が必要であるとされた。

秋田でのカンダチの分布を見ると、LAJの調査段階で、その周囲分布がようやく秋田南東部に達したというような分布をしており、北西部（秋田市方面）へは及んでいない。また、LAJの「雷」では常陸にカンダチの分布は見られないものの、他の文献によってごく最近までカンダチ類が使用されていたことも確かめられている（迫野一九八二）。分布と文献での以上のような面から、『政景日記』のカンダチは、常陸方言として留どめられたものと考えられよう。

LAJでの分布は、関東南西部まで周囲分布をなしており、それらの分布は、常陸から伝播したと見るより、時期的にみて関東の中心部から拡大した可能性の方が考えられるから、既に中世末期において、関東の中心部と常陸、さらに南東北という広い範囲でカンダチが使われていたものと推定される。<sup>(3)</sup>

この語の拡大時期が、文献での年代からどれほど遡らせて考えられるかは、その誕生地や拡大の中心地とも関わっ

てくる。また、この時代の語の伝播速度の問題もある。

伝播速度については、徳川宗賢（一九七二）による全国平均伝播速度年930m、東海道方面での平均伝播速度年750mの試算がある。時代・中心地・方面の条件の相違が大きいが、右のカンダチの分布から考えて、少なくとも室町半ば頃、早ければ室町前半のうちにはこのような東日本での語の分布拡大を可能にするような言語的動きが生じはじめていたことは推定されよう。

以上のような、その文献の年代と地域性および方言分布の広がりなどから、このカンダチをもって、東日本層の時期を少なくとも室町半ば頃まで遡らせて検討する必要があるかと考える。同時期のほかの事例、あるいはさらに遡る事例についても、今後調査を重ねたい<sup>補注(2)</sup>と思う。

## (2) 「近代全国層」の問題

拙論の四層のうち、近代全国層の時期については、井上史雄氏からの次の御指摘があった。

なお安部（一九八八a、一九八八b）は、D「近代全国層」をあげているが、『日本語地図』の段階では、全国に広く分布する新しい語形は、そう多く見つからない。東京からの語形が「空からばらまいたように」（柴田一九六九）全国に分布するのは、意外に最近のことと思われる。（略）（井上史雄一九九〇、五九頁下一行以下。尚、右の安部（一九八八a、一九八八b）は、本稿参考文献（発行年月日順）の一九八八bと一九八八aに該当する。）

L A Jをそのまま見る限りでは、井上氏が指摘される、全国に広く分布する共通語としての新しい語形は、確かにあまり多くはないように見える。拙論で近代全国層の時期を考えるにあたって考慮されたのは、L A Jで併用処理と呼ばれている作図原則で削除されている共通語（標準語）があることである。

L A Jでは、同一地点で二個以上の回答があつて、標準語と一致する回答に、共通語的である・新しい・上品である・改まった場合に使う・まれにしか使わない、およびこれらに準ずる説明がある限り、原則としてその回答を地図に記載していない。調査項目によってその現れ方はまちまちであり、量的にも確かに多いというものではないが、それら散見される標準語形の存在は無視できないと思われた。

また、L A Jは当時における日常使用語の調査、つまり方言語形の調査を目的としている。標準語の使用、標準語の浸透といった観点から調査されたものではない。L A Jの「解説―方法―」における「質問の方法」を見ても、被調査者が「標準語で答え、あるはずの方言が出ないとき」は、「別の言い方はありませんか、土地のことばではどう言いますか、などと聞いてみる。」という統一された指示がなされている。しかし、その逆の場合、方言形で答えた後の指示はない。つまり、方言語形を答えた後（語形が複数の場合であっても）、標準語形がどうかを考慮して答えを待つ、というやり方はとられていなかったと思われる。この点から見ても、L A Jの調査は、（その目的からいって当然のことながら）共通語ではなく、むしろ方言の方に重点があつたということができ、その点も考慮しておかなければならないように思われる。

近代全国層は、共通語による層と位置付け、共通語がそれ以前の方言形と併用されつつ重なって分布をかたちづいている場合も考えられたが（安部一九八七）、方言を捨てて共通語使用にすっかり切り替えてしまうのではなく、現在でも地方の若年層にも認められるような、共通語と方言語形の二重言語使用のような状況も考慮された。L A Jでは、方言と共通語との二重言語使用の重なり具合ではなく、方言の使用の方をむしろ描き出しているということはないであろうか。

その意味で、L A Jという資料では、共通語の浸透度という観点から測るには必ずしも充分ではないのではないか、という面も懸念されるのである。



この点については、『方言文法全国地図』(GAJ)に関するものではあるが、LAJの作成にも携わった佐藤亮一氏の次の言及がある。

GAJは高年層の低い文体(くつろいだ場面)における言語を調査したものであるが、日本語の現状を把握し、将来を展望するために、(略)中年層以下の年代が用いる高い文体(あらたまった場面)の言語の調査を多数の項目について全国的な規模で行うことの必要性をあらためて強調しておきたい。(佐藤亮一・一九九二、五七頁上)

右の「低い文体における言語」の調査である点は、LAJにもあてはまるものであろう(また、関連して佐藤亮一(一九八六)も参照)。

しかしまた逆に、LAJの併用処理のみでは、全国的分布の形成を測るに充分とはいえないという点では、やはり井上氏の指摘された点は問題として残ろう。併用処理を含めてもLAJにおける近代以降の共通語語形の分布はやはり確かに多いものではない。

共通語の普及の時期として考慮すべきは、むしろ、テレビの普及以後の時期であるかもしれない。安部(一九八九)で、文献における太陽を表す語形を取り上げた際にも、進藤咲子氏より私信にて、「因に、わたしは、テントウです」という旨の御示唆を頂戴し、この問題について考えさせられた。

量的な点を考慮すべきか、段階的にその発達を位置付けるべきかなど、検討の必要などと思われるが、いろいろな調査も多くある時代であるだけに多方面からの分析が必要と思われる。今後の課題とさせていただきます。

### (3) 古代における分布の問題

次に、拙論の「古代全国層」の中心地の問題について取り上げることにする。

安部(一九八八)では、古代全国層の中心地について、その本文部分では特に明確なところを記さなかったのでは

るが、その図①「方言四層」においては「畿内」とのみ記している。

小林隆氏は、

文献時代以前というような日本語自体の成立と関わる時代のこととなると、その放射の中心をどこに求めるかが問題となる。少なくとも、安部氏や本稿がとるような、京畿のみに中心を想定する考え方はもはや許されず、九州北部など京畿より西方の地域にも注目する必要がある。この問題は、さらに東西対立と基層言語との関係という難問にも発展していかざるをえないはずである。(小林一九九一、一八八頁)

と述べ、古代における伝播の中心地に関する問題を指摘された(小林一九九〇添付徳川宗賢氏「コメント」も参照)。「畿内」と想定したのは、例えばナキ(地震)やアキヅ(蜻蛉)などのように、上代に中央語として例が見られる語形が、全国規模での周囲分布をなしている場合、東と西の周辺部に中央部からほぼ対照的に残存分布をなしていることを考慮したということがある。畿内以外で、文化の中心地、伝播の中心として考慮される九州北部が、もし古代で全国的分布をなす中心地であったなら、その位置から考えて、西(南)では伝播が最端部に行き着くか、さらには次の語に押されて消滅してしまうかしてしまっても、東(北)では東日本のどこか途中段階で分布しているというような、非対称的な残存分布が少なからずありはしないかと思われた。しかし、実際にはそのような分布は、見出しがたいうようである。

九州説の問題は置くとしても、また、上記のような対照的分布の事例からは畿内が想定されるとしても、現段階においては、古代の全国に亙るような分布に関し、その中心地をいずれかに規定してしまうことには、やはり問題があると思われる。

また、小林氏は基層言語の問題にも触れておられるが、基層言語の問題とはまた別に、周囲論を適用して最古層の分布を解釈するうえでの問題をもはらんでおり、重要な問題提起と思われた。以下では、その問題提起に導かれつつ

も、それとはやや別の視点から、この問題を改めて考えさせていただくことにしたい。

拙論の「四層」における語の伝播の層の考えは、

- 全国方言分布を周圍論によりつつ文献資料と対照させながら解釈していく上で、特に語の①伝播の時期、②伝播の中心地、③伝播可能な範囲（伝播圏）、④伝播経路、⑤伝播速度の五つが基本的な観点となる（安部一九八八）

と考へ、このうち①②③の三点から全国方言分布の成立の過程を整理してとらえたものであり、「中心地と伝播圏の異なる」（同上）語の分布の層の積み重なりを考えたものであった。つまり、ある文化的中心地からの、ある一定範囲に及んだ（及び得た）伝播、という点で共通性をもつ語の分布によって、四つの層を規定したものである。

ところで、文献時代を遡れば遡るほど、東日本・西日本などの広範囲を対象とするような文化的中心地は想定しにくくなる。さらに、基層言語に関わるような段階まで遡らせれば、東・西日本における中心地というとらえ方自体が果たして意味をもち得るかどうかという問題も考えられよう。その段階において、伝播の中心地及びそこからの語の伝播という視点でのみ分布状況を説明するような、周圍論的解釈、あるいは、この「層」によるとらえ方は、果たして適応されるかどうかということが、まず検討される必要があるように思われる。

また、その段階での分布が伝播によるものでなく、例えば人的移動そのものによるようなものであるならば、周圍論による解釈自体も当て嵌められないことになると思われる。これは、周圍論によって日本語の最も古い分布をたどる場合、その遡れる範囲においては一定の限度があることを意味しているようにも思われる。

拙論では、方言の「全国的規模の広がりを見せるような広範囲の語の伝播は、奈良・京・大阪・江戸・東京を中心とするものが多いので」、伝播の中心地をこれら全国的文化の中心地に限って考へた。それゆえ、東日本や西日本よりもかなり狭い範囲での分布（例えば、近世における藩単位の分布）や、その中心地については別に扱っていかなければ

ばならないことにも触れている（安部一九八八b、一八〇頁上）。それゆえ、「古代全国層」とした時期に、畿内を中心とするものとは別に、例えば九州北部を中心として、九州全域という比較的まとまった範囲を伝播圏とする分布の層が認められるようであるなら、拙論での定義に照らしても、それは、古代全国層とはまた別に、（例えば、「九州層」のように）規定されるべきものと考えられる。（これに関わるかどうかは別として、視野に入れておかなければならない問題という程度の意味で触れさせていただければ、よく知られているように、LAJに見られる主に九州を範囲とするいくつかの語の分布の解釈の問題はある。それらの伝播の中心地・伝播の時期など、歴史的位置付けに関わる部分は、文献上の制約が大きく、現段階では極めて難しいものがある。）

一方、古代全国層の中心地の問題は、西日本層がいつの時代まで遡ることになるのかという問題とも関わってくる。西日本層が遡る範囲については、まだ検討材料のひとつではあるが、LAJ「数える」の地図におけるヨムの事例のように、暦や文字の伝来時期と関わる可能性が考慮されるものも見られる（安部一九九〇・一九九一）。

さらに遠く遡るなら、特定の一地域に限定するのが可能かどうかという問題を改めて検討しなければならないであろうと考えるのである。

おわりに

本章（1）（2）において、東日本層、近代全国層の時期の問題を取り上げた。このことと関わるものとして、藤原与一氏の次の御指摘は、特に分布とその中心地という点において、極めて示唆的であると思われる。

婦謬法的な考察をここに加えてみる。近畿以外のどこに中枢部を求めることができようか。関東中心の言語流布は、ほぼ近世以降のこととして理解しうるものである。多くは、主として近代の現象とされる。

関東以外、これという中枢部は、ほとんど想定することができない。（藤原一九八三、一三〇頁、引用に際し、

傍線を付す。以下同じ。)

三、室町時代の語例をめぐって

二において、カンダチの事例によって、東日本層の時期を少なくとも室町半ば頃まで遡らせることを述べた。その際、東日本層の成立時期への疑問点として小林氏が上げたウブウ・カリルについては、その位置付けに検討される点があるとして別にした。以下ではその理由を説明したいと思う。

(1) ウブウ・オブウについて

まず、ウブウ・オブウについて述べる。小林(一九八九)において、「おんぶする」の東国例として上げるのは、『天正狂言本』柿くい山伏のウブウと近世後期の『南江駅話』のオブウである。

L A J 64 図「おんぶする」で、バ(ハ・パ)行音部分が長音化している語形を見ると、福岡にオンボー・オッポーを併用回答している地点がある。この付近は西日本においてオブとオウの接触地域であるが、小林(一九九一)でもウブウ・オブウの発生にオブ(帯びる)のほかオウが関わっていたであろうことを示唆されているように、オブ・オウの混交によってバ行音が長音化することは、東日本だけでなく西日本でも起こり得ていたことは考慮される。(また、母音ウとオのゆれの歴史的に少なくないことも考えておかなければならない。)

ところで、『天正狂言本』のウブウは、夙に蜂谷清人氏が、オブウの転じたものとしてその東日本方言(東国方言)としての性格を問題として取り上げておられる(蜂谷一九七七)。いま、オブウではなくウブウという語形に限定してL A J を見ると、この語形は福島・長野・神奈川とその内側の関東にのみ分布をもち、いわゆる東国の範囲に分布する。その点で東国文献であるともいわれている『天正狂言本』にこのような関東分布の語形と同形が見出せることは、

東日本層の時期を考える上でも、また、『天正狂言本』の地域性を考える上でも興味深いものと思われる。

ここで考慮されるのが『天正狂言本』（以下、天正本）の地域性である。天正本の地域性をめぐる論考は、表章氏の東国成立の可能性の指摘に始まり、現在までいくつかなされている。しかし、東国成立の文献である可能性の高さを指摘する論文もある一方（迫野虔徳一九七一・一九八七、蜂谷清人一九七七、江口泰生一九八七）で、それに対する疑問や反論（遠藤邦基一九七五、金井清光一九八二）も提出されており、それについては近時の江口泰生（一九八七）でも言及されているとおりである。

それらの中で、迫野（一九七一）は、天正本の「借りル」を取り上げ、その東国的言語指標としての有効性を論じ、そのことを主題としたものと考ええるが、次節で取り上げるように、カリルという語形は、「東国的」ではあるが必ずしも「東日本」に限定できる語形とまではされていないことは、その行論から推察される。（その資料的性格としては、迫野（一九八七）では「東国で成立した文献であることはまず間違いないことと思われる。」とされており、）

また、東国成立説に立つ中で興味深いものに、江口（一九八七）がある。江口氏は、天正本の動詞音便形を詳細に分析して、中央の文献にも例の見られない事象（ガ行四段活用動詞のイ音便脱落形など）と秋田方言との類似を指摘し、天正本の音韻的背景として、秋田方言のような促音と撥音の音韻的独立性が乏しく、ガ行四段動詞の音便形が特殊である方言を示唆され、後者は中央の国語史に認めがたいとされた。

秋田という点から見てみれば、先に記したようにLAJ 64図「おんぶする」におけるウブウの分布は関東付近のみであり、秋田には見られない。ウブウとも表記され得ることが考えられるンブウ(NBUU・NBU)の分布を見ても、山形・福島の分布である。一方、中世において、秋田と同様の性質をもつ方言は東日本でもほかになかったかどうかという問題は残ろう。また、この山形・福島との関連では、表章（一九五六）の「伊達家・上杉家など」東北のいずこかの藩に仕えた地方狂言師の記録したものという推察が思い起こされる。

以上のように、天正本については、現在のところ、東国文献である可能性が高く、その観点からの検討が必要なことについてはおおかた認められていると考えるが、断定するまでには、反論やウブウの分布また江口氏の指摘など、その地域的多面性をも考慮に入れつつ、いまま少し検討の必要性もあらうと思われるのである。

ところで、ウブウについては、天正本以外の例も指摘されている。江口（一九八八）では、『梅津政景日記』でのウブウの例（元和六年九月晦日）を上げておられる。政景の言語の大体のところは常陸のものと考えられるが、語彙などは問題がないとはいえないとされている（迫野虔徳一九八二）。政景が仕えた秋田藩内には、先に見たカンダチもこのウブウ（ンブウ）の語形も分布が見られないことから、これらについては、やはり常陸方言の可能性の方が考慮される。仮に、そのように考えられるとするなら、地域性が未だ確定しがたい天正本と、『梅津政景日記』のウブウの場合より、時代的にもわずかながら先行し、距離的にも離れた地域での例が認められるカンダチ（カダチ）の方が、やはり考慮されてくるのである。

ウブウの関東の分布は充分考慮されるところであるが、天正本の東国文献としての地域性がより明らかになれば、カンダチに前後して、東日本層成立初期を考えさせる事例としてウブウも改めて検討される必要があると考える。

## （2） カリルについて

次にカリルについて述べる。カリルの方言分布は、LAJで見ると、東日本全域と山陰地方にまとまった分布をもち、また、愛知・中京地方のほか、九州北部・四国・中国地方に点在して見られる。カリルについては、これら西日本分布をどのように解釈するかという問題がある。

このこととも関わることになるが、カリルの成立については、いくつかの言及がある中で、鈴木博氏、亀井孝氏の解釈を踏まえて提示されている迫野虔徳（一九七一）があり、それは小林（一九八九）でも取り上げられている。

迫野論文におけるカリルの成立理由とその過程ならびに位置付けは次のようなものである。

成立の背景については、カリルの分布と、LAJ72図のカッテクルを「買ってくる」の意で使う地域（ハ行促音便地域とされる）とは、その分布がほぼ完全に一致している。そのことから考えて、カリルと買ッテクルの音便の形とは密接な関係をもって成立していると考えられ、カリルの成立は、「買う」の「買って」という促音便形との同音衝突を避けようとしたところにその契機があった、とされる。

成立過程については、四段動詞において促音便が生じた段階において、「買ふ」が「買って」と促音で実現された地域では、同音衝突の恐れがあるため、「借りて」は「借って」という音便化を果たせず、「借りて」に押しとどめられていた。そのうち、ほかのラ行四段動詞では促音化が進み、ひとつ、「借る」のみが非音便形「借りて」で孤立すると、むしろ、連用形が音便化しない「降りて」などの上一段上二段語との「同類意識」が生じ、「借りる・借りよ」等の形を派生して、上一段化した、と推定されている。

そのような成立背景から、結論として、カリルはハ行促音便地帯で成立した東国語であり、東国文献の言語指標となりうると位置付けておられる。

「買う」の促音便形カッテが、カリルの成立に先行していたかどうかは、文献ではまだ確認がとれないが、いま、カリルの成立過程についてこの説に従えば、成立のための条件としてハ行促音便が生じていることが上げられている。つまり、カリルの成立背景としては、間接的ながら音韻的背景があることがわかる。

先に記したように、迫野氏が買ッテクルの分布からハ行促音便地帯とした地域は、東日本のみならず、西日本にも確認される。この点は迫野氏も確認されておられる。ハ行促音便地帯であるなら、文化の中心地であるか、地方であるかを問わず、カリルが成立可能であったことになる。実際に、東日本とは離れて、山陰地方などでもカリルが発生している。これらのことは、カリルの成立において、文化の中心地から周辺部に語が広がって分布が成立していくよ



うな周囲分布による分布の成立とは、また別の側面があることを示していると考えられるのではなからうか。

ところで、拙稿では「方言四層」における「層」の考えを次のように規定している。(以下、安部(一九八八b)による。)

○特に語の伝播の及んだ範囲という視点からとらえると、変遷過程にはその範囲の相違によって四つの層に分けられるようなくぎれが認められる。(一七九頁上)

○伝播圏を問題とするといっても、京阪や江戸のような全国的な文化の中心地から語が伝播した場合と、ある地方の中心地から語が広がった場合とではおのずからその性格が異なつてこよう。(略)後者ではその地方ごとに地理的歴史的條件が異なり、その点を充分考慮しながらその地方ごとの伝播範囲を考えていかなければならない。

(略)(一八〇頁上)

○いま③伝播圏の中心地をこれらの全国的文化の中心地に限り、全国方言分布の成立の過程を考えてみることにする。いくつかの語彙項目に限ってみていくと、(略)その後、近世になって勢力を得た江戸を中心にして(引用者注、要修正)、主に東日本を伝播圏とする(東日本層)が、(一八〇頁下)

なお、右に先立つ口頭発表(安部一九八七)では、

ここでは、語彙項目を対象とし、文法・音韻事項については保留する。

とその要旨集に記しており、その点は発表以来変わっていない。

この考えにある「方言四層」において、カリルの場合の扱いで問題となるのは、カリルの成立背景には音韻上の問題が考えられている点である。

つまり、カリルの場合は、中心地からの伝播による分布成立とも必ずしも限定できず、語彙の周囲分布による右のような「層」の考えの範囲だけでは扱えない、という面がある事例であるということになる。

もちろん、仮に東日本に限定していえば、文化の中心地でまずこの上一段化したカリルが勢力を得、その影響が周囲へ伝わって東日本のカリルの分布ができたという場合も考えられなくはないであろうが、現段階では、やはり、語彙上の周囲分布と、音韻的背景をもつ語（語形）の誕生の段階とは別に扱われるべきものではなからうかと思われる。このことは音韻・アクセントへの周囲論の適用が可能かどうかという問題とも関わっている。

以上が、カリルを別に扱った理由であるが、カリルが東日本にも広く分布しているのは事実である。方言分布の成立過程を総合的に説明していく上では方言四層とは別に、音韻上の方言分布の問題を処理しなくてはならないと考えるが、それについては、機会を改めて考えることにしたい。

ところで、カリルに関するところであるので、迫野論文に関して触れさせていただければ、迫野（一九七一）において、

「借りる」という上一段活用語は、（略）ハ行四段促音便地帯、三河から日本の涯にいたるまでの東の地方のいわゆる東国で成立しそこで使われた全き東国語であったと見るべきであろうと思う。（六八頁）と位置付けられている。

カリルの成立を東国（東日本）のみに限定しているような記述ではあるが、ハ行促音便地帯とされる地域が山陰にもあることにふれておられるわけであるから、論の主題である、東国文献を位置付ける言語指標という観点からの表現であると考え（「山陰文献」はいま問題ではないという意味で）、方言分布の問題として考えた場合、ここでの「東国語」「東国」は、いまそれぞれを「東国的語」「東日本および山陰など（のハ行促音便地帯）」と読み替える必要があるであろうと推察する。（山陰を別にお考えであるとするならその場合の解釈も興味深い問題があると思われるが。）

そのように読み解くとして、このカリルの分布域でありハ行促音便地帯とされる東日本と西日本の周辺地域と、そ

うではない地域との方言的対立は、馬瀬良雄（一九七七）の「四 東西両方言対立の指標の言語的特徴」において、いわゆる「子音性優位方言」と「母音性優位方言」との対立をなす地域であるとされるものでもある。その子音性優位方言の地域は総合的にみて、「東日本および山陰地方、さらにとんで九州地方に、場合によっては山陽地方にも、子音性優位方言の特徴が濃淡の差はあるが、互いに重なり合って」周囲的に分布していると考えられることができる。

西日本の一部あるいは周辺部にそのような子音性優位の性格があつたとするなら、山陰のみに限らず西日本のほかの地域においても、ハ行促音便を生み出す下地があつた可能性が考えられ、カリルの成立背景が迫野氏の解かれたようなものであるとするなら、西日本においても、その中心地の京畿は別として、カリルを生み出し得た可能性があつたということになる。

そのように考えることがゆるされるなら、ここでやはり注意を向けておきたいのは、西日本におけるカリルの分布と、京畿文献におけるカリルである。

西日本におけるカリルは、LAJでは山陰のほか九州・四国・山陽など周辺部に広く単独回答地点として点在している。これらはすべて共通語によるものであろうか。

迫野論文によれば、『静嘉堂文庫本運歩色葉集』と、京畿系の人の手になるといわれる『一步』にもカリルが見られるという。『静嘉堂本』の地域性は不明の部分もあるようであるが、『一步』の、

物をからぬといはんとてかりぬといふ人もありおなしくあやまり也

は、はたして江戸語の上方に流入したものをこういったのであろうか。例えば西日本における都の人ではない人の言葉という可能性はまったくないのであろうか。

これらは、カリルの成立背景と併せて今後も検討されるべき問題のように思われる。

#### 四、伝播の時期と伝播の範囲とに関する問題

はじめに

拙論の「方言四層」においては、古い時代の語の分布が全国的規模で周圈的分布をなすのに対し、古代（文献時代以前）のある時期から、京畿からの伝播と考えられる語の分布の範囲が西日本に限られるようになり、そのような伝播の範囲のある意味での制限は、東日本層が成立するまで続き、東日本層成立以後は、語によっては東西間での伝播があったことを述べた。東西間の伝播という点から見ると、東日本層成立以前と以後とでその解釈を区別している。

ところで、小林（一九九一）では、近代全国層以外は、「特定の時代と対応する明瞭な区切りとして把握されるべきものではない。」とされるため、右のような時代的区別はされていない。そのこともあるためか、小林（一九九一）において、右の東西間での伝播に関わって拙論への疑問点を上げている部分でも、この区別を立てられず、東西間での伝播の制限というそのものを総体的に問題にされておられるようである。<sup>(4)</sup>

それゆえ、ここでは改めて右の区別について説明させていただき、その上で、拙論に該当する疑問点としての東日本層成立以前の問題について取り上げることにはしたい。

##### (1) 東日本層成立以後の東西間の伝播について

西日本から東日本への伝播については、拙稿（一九八八b）で、

西日本のみという伝播圏については、ツキヤマのように東日本への伝播の例もあり、（略）近世半ば（引用者

注、要修正）以降は語によっては東日本にも伝播する場合があったようである。（それは、△秃頭▽の変遷にお

けるヤカンにもみられるが、(略)(二〇〇頁下〜二〇二頁上)と記した。

また、同じく一八一頁上の方言四層を簡略に図示した「 $\wedge$ 図① $\vee$ 方言四層」でも、その西日本層の伝播圏のところに「西日本(後東日本にも)」と記しておいた。安部(一九八八b)でその注に上げた安部(一九八七)でも、

C(引用者注、東日本層)で(同注、西日本層と)別語形が生まれた場合はいわゆる上方語・江戸語(西日本方言・東日本方言)の対立をかたちづくり、分布域の差が顕在化するが、時としてB(同注、西日本層)のいわゆる上方語が伝播・拡大し、B・Cの境界は曖昧になる。と記している。

また、東日本から西日本への伝播については、安部(一九八八b)の同「 $\wedge$ 図① $\vee$ 方言四層」の「東日本層」の伝播圏のところに「主に東日本」と記しておいた。

また、安部(一九八七)でも、右の引用に続く部分で、  
各段階の差がはっきりしないものは、同じ語形が使われたり、BC間での語の伝播があったものばかりであると記している。

以上のように、東日本層成立以降において、東日本と西日本との間で語の伝播があった場合を考慮してきており、この点は発表以来変わっていない。

いま、(2に)先立って、この点を確認しておくことにしたい。

(2) 東日本層成立以前の東西間の伝播について

次に、西日本層成立以後東日本層成立以前での東西間の伝播、特に、西日本から東日本への伝播についてみていき

たい。

東日本層の時期を、旧稿では近世半ば以降としていたので、例えば一七世紀代以前の東日本方言が、東日本語形として文献で確認されれば、そのようなものも、カンダチと同様、東日本層の時期設定についての疑問例ということになる。

以下では、小林（一九九一）において、拙論での東西間の伝播の扱いにおいて疑問となる例として上げられているもの（注4の引用部分で省略した二四例）を中心に取り上げることにする。東日本方言語形の文献例については、わたくしに調査したものもあるが、拙論に修正を加えているところもあって煩雑になり、また、疑問点にお答えすることが目的のひとつでもあるので、主に小林（一九八九・一九九一）で指摘されている事例を上げながらみていくことにする。

なお、東日本層については拙論に修正が生じていることもあるので、ここでは、旧稿段階での問題事例と修正後のそれとを区別しながらも、後者に焦点をあてて述べることにする。

### ① 東西対立分布の語形について

まず、小林氏が東西対立分布の事例として検討されている一〇語形を見る。

それらのうち、およそ一八世紀以降の東日本語形としての文献例が上げられているものは、四（一）に関するものと思われるのでここでは除いて考える。シヨツパイ・シヨウ・クスリユビ・クルブシなどが該当しようか（クルブシは、言語地図の分布を東西いずれの語形と見るか解釈の余地があると思われる。また、その後の調査によってはもう少し古い文献例も見出されているかもしれないが、その場合は、今回の修正によってその位置付けが検討されよう。）

「茄子」の東日本語形ナスの場合、その京畿での初出は現在のところ一五世紀後半頃の『お湯殿上日記』（『日本国

語大辞典』である。かかし(案山子)のカカシ(カガシ)の初出は寛正四(一四六三)年の『さゝめごと』とされる(鈴木博一九八二)。

これら京畿の文献に認められるナス・カカシの伝播が、いつ東日本に達したのかは、今後も調査が必要であるが(小林(一九八九)段階でのカカシの例は近世後期)、それが、はやく室町後半頃であるとしても、これまで近世半ば以降としていた場合のような時間的な隔たりは問題とならなくなるであろう。アグラカク・キノコも同様(但し、キノコは、小林氏も述べておられるように地図の解釈に複数の可能性が依然ある)。

コヌカ(糠)については、その文献例がヌカ(糠)と近接し、中古以降(『色葉字類抄』)である(小林(一九八九)では中世前期とするが、佐藤亮一監修(一九九一)「糠」参照)。LAJ「靱殻」の地図と合わせて解釈した場合を考慮するなら、少なくとも現段階では、小林氏も上げるようになお複数の解釈が考えられ、また、これが稲作関係語彙であることを考えるなら、文献の例以前に遡る可能性を低くみる事ができないように思われる。

カヅク(カヅク)については、東西境界線より東に隣接する地域には西日本からのカヅクの侵入がなく、東日本で分布が陸路とは異質のものであることがわかる。東日本での日本海沿岸の分布は、やはり日本海沿岸のカタネルの分布からみても、陸路によるものというより、日本海航路による海路の分布の可能性が考えられる。東日本太平洋側でも東海の分布が見られないことから、伊豆・大島などの分布も同様に海路による可能性が考えられよう。

陸路においては、伝播の中心地からの物理的距離が、ほぼその伝播の前後関係となって跳ね返ってくるが、海路においては必ずしもそうならない。海路の区間は、ある意味で特殊な飛び火区間である。海路による分布の地点間には、周围的解釈における地区連続の法則が適応されないわけで、海路による場合は、陸路とは区別して別に扱われるべきであろう(四(3)参照)。(そのこととは別に、一七八七年の『通言総籙』の、ト書き部分にあるカヅクの例が報告されている(蜂谷清人一九八五)。本文部分では、同じ状況にカヅクが使われている点で疑問があるものの、そのこ

るの江戸でのカツクについては、海路による可能性も考えられる千葉の分布と併せて今後も調査が必要であろう。

以上が、小林（一九九一）において、東西対立分布に関わる語形の中に見出される疑問例として上げられているものである。これらは、明らかに問題例となるものではないと考えられたが、カズクに関わるカツグの方は問題となる（あるいは、小林氏のカズクの指摘はこちらも含むという意味であるか）。

カツグは、蜂谷（一九八五）において、『雑兵物語』にその例があることが指摘されている（江口（一九八八）、小林（一九八九）でも取り上げられている）。東日本層の時期を近世半ばとしていた段階では、この例が考慮されていないことになる。安部（一九八七）に先行する指摘であり、これを考慮すれば少なくとも近世初期を考えなければならぬものであった。今回の修正によって説明可能となろう。

## ② ①以外の語形について

以下では、東西対立分布以外の事例から疑問例として上げられてものを取り上げる。これに該当する例として具体的には一二項目一四語形が上げられているが、具体的検討は省略されているので、どのような解釈をとって疑問例とされたものか、四（一）に述べたような点に関わるものも含むのか、必ずしも明らかでない。それゆえ、ここで取り上げるのが適当かどうかとも思われる。

例えば、アタマ（頭）については、初め頭頂部のひよめきを指したものが、後に頭部へと意味を拡大させたもので、頭部の意味を持って使われるに至ったのは、宮地敦子氏は、（京畿において）室町後期頃（原文「室町（末）期以降」）からとされ、『漢書列伝竺桃抄』『詩学大成抄』などの例を上げられた（宮地敦子一九七九）。

また、柳田征司氏は、「アタマは既に『頭首の総称』となっていて（略）、しかし、室町時代においてはアタマはまだ漢字頭・首とは結付けられるに至っていないなかったのである。」とされており（柳田一九七二）、アタマが西日本で頭



の意味で定着するのは意外に遅かった可能性もあり、その点も考慮される。

L A Jでの質問文は頭全体を聞いており、また、徳川宗賢監修『日本方言大辞典』の「あたま」の項には「ひよめき」の意味はない。現時点では、アタマが頭の意味で東日本に広がり得る時期を、古く遡らせるに十分な資料が得られていない。

これなどは、あるいは四(1)のことに関わるものであるかもしれない。それゆえ、ここでは、小林氏のほかの御論文からわかるものなど、一部に限って触れておくことにする。

顎を表すアゴは、小林(一九八四)によれば、近世一六八五年『医方大成論語解』の例から上げられており、顔を表すカオは、小林(一九八三)の段階では、庶民階層での普通称としてカオが使われている例として『虎明本狂言集』が上げられている。共に京畿文献によるものであるが、東日本層を近世半ばとしていた段階でも、これら語の東日本への伝播時期は考慮された。東日本での使用時期については今後も文献での調査検討が必要であろうが、今回の修正による東日本層の範囲には含まれてくるものと考えられる。

ところで、小林氏は、そこに上げられた例を「文献時代以降の京畿語」「文献時代に入ってからからの京畿語<sup>(5)</sup>」とされるが、これらには、奈良時代以前からあって、しかも東西日本に分布していた可能性はまったくないのであるだろうか。

例えば、太陽を表すテントウは上代から例があり、上代・中古を通じて特に会話文に用例が多く、口語的性格もろうかがわせる語である(安部一九八九c)。分布も東日本のほぼ全域に及んでおり(L A J、安部(一九九一))「太陽」参照)、文献以前における時代に東日本に分布していなかったと断定するのは容易でないように思われた。一方、文献での東日本の例からは、近世になってから特に勢力を得て広がったという可能性が大きいように考えられる。そうであるとすれば、近世になってからの東日本への伝播ということも考慮されてくる。

このように、東西対立分布以外の場合の疑問例については、(1)に関わるものもあり、また、解釈によって必ずし

も疑問例とはならないものではないかと思われる。それゆえ、ここではそれらひとつひとつを取り上げず、機会を改めてこれらを含む方言地図の解釈を示す（あるいは、改めて解釈上の問題点を具体的に指摘していただく）ことにしたいと思う。

ただ、一四語形うち、唯一「トンボ(蜻蛉)」の場合については、一見単純そうに見えながら、その解釈に様々な可能性があり、東日本層の時期について修正を加えても、なお疑問をもたれかねない事例と思われた。ここでは、少なくとも様々な解釈がある得るということを示しておく必要があるかと考えられたので、少しくふれておきたいと思う。「蜻蛉」の方言語形を大きく分けるとアキツ・エンバ・トンボに三分類される。そのトンボの中の諸語形をどのように位置付けていくかによって、全体の解釈が大きく異なってくる。(それゆえ、小林氏が疑問例としてトンボとされた範疇は、この三分類におけるトンボか、厳密な意味での語形 TONBO などなのか不明のため、疑問には直接お答えすることができないことになる。)

「蜻蛉」に関する方言の研究は少なくないが、それらの中で、福島邦道(一九七二)、加藤正信(一九七三)などの諸研究を踏まえ、簡潔ながらも現時点における解釈の可能性を多角的に検討されてまとめられているものに広戸惇(一九八六)での「蜻蛉」がある。

L A J 「蜻蛉」の地図のわたくしなりの解釈について詳しくは別の機会に譲るが、いま、当該の問題となる点に限って、広戸氏の引かれる諸説ならびに氏の解釈を紹介してみることにする。

○北条忠雄氏は、ダンブリは湿地や沼を意味する方言からの転用であろうという。トンボの語源が、東北地方に分布するドンブリ・ダンブリなどにあるという説は、今日でもかなり支持されている。

○さて、トンボのトンバは、(略)トンバウ↓トンバと見て全くさしかえがないのであって、共通語トンボ、山陰地方のトンバは共に文献の示すトンバウの系統を引くものであり、筆者は、あえてダブリやダンブリを語源と

するには当たらないと考える。

○かつて中央にはダンブリ・ドンブリの形があつて、それがトンバウの形となつたとは考えにくいことを言いたいのである。むしろトンバウを中心としてドンブが生まれドンブリが生じダンブリが生じたかも知れないし、あるいは中央とは別にドンブリの形が東日本には古くから存在したかのいずれかであろうと考えるのである。

現在のところ、語源を含めたトンボの語形変化の解釈には、北条氏の説として上げられている(筆者未見)ダンブリ・ドンブリ→トンバウ→トンボー→トンボ説と、トンバウ→トンボー→トンボ説とがあることがわかる(トンバウ段階については「飛ぶ棒」「飛ぼう」などの説が広く行われている)。その記述をみる限り、必ずしもどちらともいいがたいが、広戸氏の併記するように東日本を別に解釈する可能性もあることが分かる。また、方言地図での諸語形を、トンボ類に含めるか、ダンブリ類に含めるかでも、歴史的解釈が微妙に異なつてこよう。

北条氏のように解釈される可能性があるとするなら、「蜻蛉」の分布の歴史も、アキヅ・エンバ・トンボの三語形で考えた場合よりかなり複雑になつてくることは確かであろう。その意味で、少なくとも、修正された拙論においては、トンボは必ずしも疑問例にならないとも考えられるように思われるのである。

なお、このことを補足する意味で、参考までに、語形トンボ類及びダンブリ類の方言分布の解釈に関わつて次の点を指摘しておきたい。

ひとつは、トンバウ→トンボー→トンボと変遷したと推定されるこれらの語形と、方言語形の分布との関わりである。文献において、トンボが見られるようになるのは、広戸(一九八六)によれば近世(『かたこと』)になつてからである。LAJで、トンバウ・トンボー段階での語形を留めると考えられるTONBOO・DONBOOの分布を見ると、その分布は新潟を含む西日本の範囲に限定されており、東日本には分布がないことがわかる(トンボー・トンバウは西日本層段階の語形という可能性はないか)。

いまひとつは、トンボ類の語形を仮に TONBO・KAWATONBO・TONBOO に狭く限定して見た場合、その分布に明らかな東西差が見られる。これらの語形以外のトンボ系語形（ダンブリなど、アキヅ類・エンバ類以外のすべての）分布を仮に全て総合的に見てみた場合、西日本の周辺部の僅かな分布を含め、その分布は、いわゆる「三辺境分布」（佐藤亮一監修一九九一「三辺境分布」参照。）をなす。特に、右記のトンボの分布を除いたトンボ・ダンブリ類の分布と、上代に例のあるアキヅとを併せて見た場合、安部（一九八九a）で三辺境分布として上げた中の「東日本広域分布型」の、東日本で関東付近を取り囲むような分布を示す古い語形の分布の多くと（例えば、コマ（馬）、イキ（蒸気）、アクト・アド（踵）、マキ（メ）（旋毛）など）、極めて類似した分布をなしていることが指摘できる。この一致が偶然のものであるかは、今後検討される必要があると思うが、少なくとも、右のトンボ類とそれ以外のいくつかの語形とは区別される必要があると思われる（「東日本広域分布型」と同様の分布を示すこの分布は、古代全国層での語形という可能性はないか）。

つぎに、湿地・沼・水溜まりなどを表す方言語形について見てみよう。湿地を表す語形としてのダンブリ・ドンブリ類の語形を、徳川宗賢監修『日本方言大辞典』の「どんぶり」で見ると、ラ行音の付く、ドンボリ・ドブリ・ドンボレ・ドンボル・ドンブラ、また、ドンボ（西日本のみ）などの語形を中心として、北陸・中部・東海・近畿・九州などに、広く分布が認められる（東日本の分布がやや少ないようであるが、いわゆる共通語「どぶ（溝）」も考慮される）。宮崎のドボリなどは、鹿児島に分布するボリ・ボイとの関連をも考えさせる（広戸氏は、ヘンポーからの変化も考えられるとする）。

ダンブリは、東北ではアキヅよりも遠くに分布し、トンボ（TONBO）はアキヅよりも中央寄りに分布する。広戸氏は、「ダンブリ・ドンブリの形があつて、それがトンボウの形となったとは考えにくい」とされる。語形的には確かに遠いように見える。ただ、その間の橋渡しが皆無であるかと問われるならば、水辺の虫、ドンボ（西日本に分布）

・ドンブリに、「飛ぶ棒」の語源俗解が重ならないとは、必ずしも断言できないようにも思われてくる。

以上は、「蜻蛉」の解釈にもまだ様々な可能性があり、拙論に矛盾する事例には必ずしもならない場合があるのではないか、という範囲において述べさせていただいたものである。

一語形の位置付けを行うためには、やはり、ひとつひとつの地図全体の分析を細部に亙って積み重ねていかなければならないようである。

(3) 海路による(主に西日本から東日本への)伝播について

(2)においてカズクの解釈を述べた際、海路による伝播の問題に触れたので、ここで改めてこの問題を取り上げてみたい。

小林(一九九一)では、拙論における海路による伝播の扱いについては特に疑問点・問題点を上げてはいるわけではない。カズクも、ほかの例と同じように、基本的に多くは陸路によると考えられる「文献時代以降の京畿語の東への伝播」の問題例として、上げられているものであると思われる。

(2)①のカズクでも少し触れたように、海路による伝播については、陸路による場合と事情を異にする面があり、拙論での扱いも、後に記すように陸路による場合とは異にしてきている。これまで、この問題については特に説明を加えてこなかったこともあるので、ここで拙論を補足する意味で説明を加えておくことにしたい<sup>(6)</sup>と思う。

西日本の方言語形が、東日本の日本海沿岸に分布することはよく知られており、それらの多くは日本海沿岸航路による海からの伝播によるものとされる。それゆえ、その分布の扱いも、糸魚川・浜名湖線の東西境界より東での分布ではあるものの、東日本としての分布ではなく、西日本の分布として扱われてきている面がある。例えば、東西対立をなす方言分布の場合も、これらの海路による伝播を考慮し、その境界線は東日本の日本海側を西日本へ含めて描か

れてきている（例えば、馬瀬一九七七、徳川一九八三ほか）。つまり、これら海路によると考えられている分布は、地理的に東日本における分布ではあるものの、一般にはこれまで西日本の範囲の分布として解釈され、処理されてきているといえよう。

これら海路による西日本方言の伝播が、いつ、どこから、どのようにして、どのくらいの規模でなされたかについては、現在のところ必ずしも充分には明らかになっていないように思われる。

ところで、拙論の立場で言えば、陸路での西日本から東日本への伝播について限定して見ると、そこには時代的な段階が認められる。古代（文献以前）のある時期までと、中世のある時期以降については、西日本の語形が東日本にも分布をかたちづくっているのが確認されるものの、その間においては、西日本の語形が東日本に分布をかたちづくっているものを確認しがたくなる。

陸路における伝播については、そのような段階的変化が認められると考えるのであるが、海路における、特に東日本の日本海沿岸への伝播には、それと呼応すると考えられるような時期的変化は、いまのところ必ずしも認められなように思われる。海路の方は、それとは無関係で、特に日本海沿岸については、むしろ日本海航路の発達過程との密接な関係が考慮されてくることになる。

このように、地理的な意味での東日本（糸魚川浜名湖線以東）への伝播・分布とはいっても、陸路による場合と海路による場合とは、伝播の経路と伝播の時期（さらに、おそらくは伝播の速度という観点でも）において、異なる面が認められることがわかる。

ところで、全国規模での方言分布の成立過程を解釈していく上では、語の伝播の時期、伝播の中心地、伝播可能な範囲、伝播経路、伝播速度の五観点が基本的で重要な分析観点であると考えられる（安部一九八八b）。この点については、小林隆氏も基本的にはほぼ同様と思われ（細部は別として）、小林（一九九一）においては、方言分布の分

析の観点として、「①放射の中心地、②放射の順序、③伝播の範囲」のほか、伝播の経路、伝播の時期、伝播の速度、伝播の強度を上げておられる（順序は時期に含まれてくる面があるかと思われる）。

これら、方言分布を解釈していく上での重要な観点と考えられる伝播の経路・時期・速度において、異なった性格が認められる海路と陸路との伝播を、東日本への伝播という点からいっしょにして処理してしまうことは適切ではなからう。さらに、陸路における伝播に限定して見ると、東日本への伝播については段階的変化が認められるので、それを考慮していく必要がでてくると考える。

つまり、海路による西日本から東日本への伝播については、陸路とはまた別に、その時期・経路などを調査し、位置付けていく必要があると考えられるのである。

ところで、一連の拙稿では、次のように、日本海航路による東日本への伝播は、陸路によるものとは区別してきた。安部（一九八六）で「旋風」の方言分布を取り上げた際、新潟・秋田にも分布するタツマキについては、「西日本に分布する語」として一括して扱い、付図でも矢印で西日本語形の分布範囲であることを示した。

安部（一九八七）で「禿頭」の方言分布を取り上げ際は、秋田に分布するヤカンと関東に分布するヤカンとについて、

（略）三重・四国にも若干分布し秋田にも伝播しているところからみて、かつては近畿一帯で勢力をもっていたものと考えられる。（略）特に東に伝播して関東で再び勢力を拡大したものと思われる。

と記し、秋田の分布は西日本からの海路による伝播、関東は東海道から江戸に入っつての関東への拡大として区別した。安部（一九八九b）で同じく「目」を取り上げた際も、メについて「日本海沿岸の分布は関東などのそれとは別に西日本から海運によってもたらされたもの」とし、解釈を加えた図3において、東日本の日本海沿岸の分布は「B」

（西日本層）、関東の分布は「C」（東日本層）と位置付けて区別した。

安部（一九九〇）において、「西日本内に分布する上代語」について述べたところで、「西日本分布の判定については、日本海海路による東日本沿岸への伝播を考慮し」、海路によると考えられる東日本沿岸の分布は西日本の分布範囲として処理している。

以上のように、海路による東日本の日本海沿岸への分布を区別し、それを従来の諸研究にならって西日本の分布に含めて扱ってきたのは、先に述べたような理由によるものである。

海路による分布については、これまでの諸解釈でも区別して扱われていることが多いこともあって、特に説明を加えないで処理してきたが、拙論を補う意味で、ここで改めてこの問題を取り上げることにした。補足説明とさせていただきます。ただくことにしたい。

（4） 小林氏の（d）のパタンに関連して

次に、小林（一九九一）で、（d）のパタンとして上げられている分布パタンについて触れておくことにしたい。

小林氏の示された東西対立分布の四つの成立パタンの一つである（d）のパタンは、「京畿から放射された語形が一旦全国に向かって広まった後、ふたたび京畿から別な新しい語形が放射され、今度は東日本を中心に伝播が行われた結果、西日本にはもとの古い語形がそのまま残った」場合というものである。

この（d）については、小林氏自身も「直感的には疑問である。」（一七六頁）、「はたして容易に想定できるかどうか」（一七七頁）、「これらの考えは今のところ全く想像の域を出ないものである。」（一七九頁）、「（d）のパタンについては、この点からも考察を深める必要を痛感する。」（一八七頁）（以上、小林一九九一）と繰り返されており、まだ検討途中のもののようなのであるので、ここで取り上げるのはいかがかと思われるが、「四つの層」の枠組に収められないということにも言及されているので、<sup>（？）</sup>少しだけ触れさせていただくことにする。



「四つの層」に収めきれないとされた理由を斟酌するに、そこには二つの可能性があると思われた。

ひとつは、四で述べたように、拙論では西日本から東日本への伝播を考慮していないようにおとりになったため、(d)の場合についても、右のようにとられたという面である。これについては、先に述べたとおりである。

いまひとつは、西日本にまったく広がらないにもかかわらず、京畿から(京畿を中心として)語形が放射されて、東日本に広がったという場合があり、それが文字通り考慮されていないということによるものとも考えられる。

(d)のパタンの可能性として、小林氏は三つの解釈を示され、具体例でそれらを検討されているが、第一の解釈は結局(a)か(b)と同じことになり、第二の解釈も結局(c)と同じになるという。さまざまな解釈の可能性がそこに上げられていることから分かるように、この(d)の中には、現時点では、文献例の上でも地図の解釈の上でもまだいろいろ検討の余地のある事例が、(d)のような「直感的には疑問」を感じざるを得ないような想定のもとに集められてしまっているようにも思われる。

例えば、具体例としてあげるカ Ril(借りる)は、(a)のパタンの可能性を支持しつつ、(d)をも考慮されるが、東日本におけるカ Rilについては、三(2)で述べたように、別の解釈の可能性があった。

(d)の中のもの、地図の解釈においても、文献との対照においても、今後の検討が必要であるということであろうか。

そのような「覚え書き」としての性格や、四層について触れられた理由も限定できないことを考慮し、ここでは具体的に取上げず、右の点述べるに留めたいと思う。

おわりに

以上、井上史雄氏、小林隆氏の御指摘に導かれつつ、拙論の修正と補足説明をさせていただいた。

東日本層の時期を、前に近世半ば頃としたのには、その段階での方言分布と文献例との解釈が最重要視されつつも、歴史的背景も考慮されるところがあった。今回、少なくとも室町半ば頃、早ければ室町前期も考えられるかと、上方修正したが、東日本に幕府のあった鎌倉時代がそのすぐ前であることを考えるなら、これが最上限とするには、やや中途半端であるという感もある。

その時代になると、東日本の文献資料を得ることが極めて難しくなり、多くの場合、方言の東日本での分布の解釈によって、その文献の空白を推定していくことにたよらざるを得なくなる面がある。例えば、LAJの「雷」において、東日本分布のカンダチの周辺部に別の語形が周囲分布していれば、例えそれが文献に見出せなくても、カンダチに先行する古い東日本方言であることが推定できることになる。日本史の資料などにも文献例を広く求めて調査を深める必要があると考える。鎌倉・室町時代の中世全般における東日本の方言状況については今後の大きな課題である。

また、西日本層に関わって、次のような問題も考えられる。

中央の語が、古くは西に伝わりやすく、東、特に東西境界線以東へは伝わりにくかったらしいことは、これまでのいろいろなかたちで指摘されてきている（例えば、橘正一（一九三六）八三頁、また、藤原与一（一九六二）五五一頁以下、徳川宗賢（一九七二）六八五頁など）。

それらの中で、徳川氏は、近畿を中心とする伝播を五方向にまとめ、各々の平均伝播速度を試算し、東山道方向を含む東海道方向については、

東海道方向だけに極く古い時代には語があまり伝播しなかった傾向が現われて、興味をそそられる。あるいは、わずかな語に限って伝播できたが、相当数の語は伝播不可能だったとでもいう事情があったのかもしれない。

（徳川（一九七二）六八五頁）

と記している。例外的にわずかな語が東西境界線の壁を乗り越えて東日本に及ぶこともあったかもしれないが、ほとんどの語は東日本に伝播できず西日本内に留まるようになる何らかの背景があったのではないかとその傾向を分析し、問題提起されておられる。古い時代における西日本から東日本への伝播上の壁は、例外もあるもののかかなり顕著な相対的な傾向としてとらえられるものではないか、という指摘と考えられる。

この徳川氏のご指摘を拙論に照らし合わせて考えてみると、伝播圏が西日本のみに限られるようになる西日本層は、絶対的な伝播圏の制限であったか、顕著ではあるが、例外も認められる相対的傾向として位置付けられるものであるのか、という問題でもあると思われるのである。今のところ、東日本層成立以前に、西日本から陸路で東日本へ伝播したと考えられる語例を見出していないが、この問題についても留意しながら考察を進める必要があるであろう。

ところで、L A Jの地図の解釈は、一つの文献資料がそうであるように、一枚の地図について、複数の研究者の様々な角度からの分析・考察が重ねられる必要がある。L A Jの「解説」や、少なからぬ論文、また、徳川宗賢編（一九七九）、佐藤亮一監修（一九九一）などがあるものの、一枚の地図に多くの多様な解釈が加わっているものは、一部にはあるものの、まだそう多くはなく、未だ十分な分析を経ていない地図も少なくない。

ここ三四年でのL A Jの解釈がやや少ないようにも思われたが、対照される文献資料の方の調査研究とも併せて、課題のなお多い資料ではなからうか。

本稿では扱わなかった音韻上の問題に関わるとしたことからについては、機会を改めて取り上げさせていただくことにしたい。本稿で取り上げたことの範囲で、御批判御教授いただければ幸いである。

また、文法事項に関する解釈についても、G A Jなどを利用した今後の分析調査にまつところが大きい。安部（一九八七）で課題であると記したそのままであるが、今後に残されたもうひとつの課題である。

拙論「方言四層」における問題点をより明確にし、考察を深めることができたのも井上史雄氏、小林隆氏の御指摘

のおかげである。また、参考にさせていただいた多くの先学の研究に教え導かれるところが多かった。深く感謝申し上げる次第です。

注

(1) なお、本稿をなすにあたっては、小林(一九九一)以後、小林氏と何度かの私信のやりとりを重ねさせていただき、また、口頭にもお時間をとっていただき、氏の疑問点および拙論の問題点をより明確にすることができた。特に、四章で触れるところのように、小林(一九九一)の記述のみでは疑問にお答えしなかった点などについては、これらの私信および口頭でのやりとりが踏まえられている。また、その過程で、直接は本稿で触れていない部分でも、御教授いただくことが少なくなかった。小林氏に感謝申し上げます。また、右のような経緯を経て本稿がなされていることをお断りしておきたい。

(2) 小林(一九九一)「東日本層の発達の時期をそのように遅くに限定してしまうことには、次のような点で疑問が生ずる。」(ウブウ、カリル、オツカナイなどのように)「中世後期から近世初期の東国文献に現れ、その発生地域が東日本と考えられている語形が存在するのであり、したがって、中世後期にはすでに東日本層の生成がかなりの程度推測されるのである。」(一八五頁一五行目)

小林氏が「中世後期」とされるのは、小林(一九八九)によれば、カリル(『人天眼目抄』(文明五(一四七三)年、江戸初中期写本)、ウブウ(『天正本狂言』(天正六(一五七八)年)によると思われる。『人天眼目抄』のカリルは、厳密に言えば成立時のものか、近世の書写時のものかという問題もあるが、いまはその点は置く。

(3) 但し、北関東から福島・宮城にかけての範囲においては、LAJ95図「雷が」おちる」のサガル、同159図「真綿」のヒキワタ、同205図「たてがみ」のシダ類のように、ある程度共通した分布を示す語形も見られるので、関東中心部と直接関わってくるものかどうか、検討の余地はある。

(4) この点に関する小林(一九九一)の記述は次のようである。

また一方で、京畿から東日本への伝播は、東日本層の生成が開始された以降も連続して行われたことが考えられる。今回取り上げた項目の中では、(一〇例、略)などが、文献時代以降の京畿語の東への伝播によるものである可能性をもつ。また、東西対立分布を離れても、同じく『日本語地図』の項目で言えば、(一四例、略)他、文献時代に入ってからの京畿語が東日本に伝わったと推定される例を多数見出すことができる。したがって、安部氏が古代全国

層と西日本層との境界の時期を文献時代以前に置こうとしている点にも不自然さが感じられる。(一八六頁一五行以下、傍線引用者)

この部分の冒頭の記述と上げられている例の関係、また「したがって」以下の結論までの考え方がやや理解しがたかった。そこには、拙論の、京畿から東日本への伝播の扱いに対する疑問ということが基本にあると思われたが、いまわたくしなりに整理させていただければ、ここには少なくとも次の二つの点が含まれていると思われる。

a 「京畿から東日本への伝播は、東日本層の生成が開始された以降も連続して行われ」ており、(例から考えても)安部が東日本層が生成されたとする近世半ば以降において、京畿からの伝播が東日本に及んでいないとするのは不自然である。

b 『伝播圏の縮小』も急激に起こったのではなく、除々にその度合いを強めていったものと考え(小林一九九一、一八七頁二行)られ、(例から考えて)東日本層の生成以前の文献時代から、京畿から東日本へ伝播が及んでいたと考えられるので、この時期伝播が及んでいないとするのは不自然である。

右は、「伝播圏の縮小」のような現象を特定の時代と対応させない解釈に立つ小林氏にとっては区別されないひとつのものである。一方、拙論においては、東日本層の成立時期以降は、西日本からの伝播を認めているので、例え「文献時代の降の京畿語」であっても、いつの時代の事例であるかによって扱いが異なってくることになる。それゆえ、aの意味での疑問点が含まれているとすれば、それは拙論に該当しないものである(本文四(1)参照)。なお、上げられている例が、a b いずれに該当することになるのかは文脈からは不明であるので、以下本稿では区別せず扱うことにする。

(5) 注(4)引用部分参照。

(6) この点については、小林氏から、これまでの拙稿の当該事例でも特に詳しい説明を加えていないこともあって、その扱いが不明確のままであるという御意見をいただいた。本節はそのご意見を考慮したものである。

(7) 小林(一九九一)「まず、前節で示した(d)の、補ウ)ような東西対立成立パターン、つまり京畿で生じた語形が西日本には伝わらず主に東日本に伝播し分布を形成するということが、実際に起こりえたとするならば、それは『四つの層』の枠組に収めきれない現象ということになる。」(一八七頁一七行)

参考文献

- 安部清哉  
 同 (一九八六)「△旋風▽の言語地理学的解釈——複雑分布の処理を通して——」(『国語学研究』26、昭和61・12)  
 同 (一九八七)「全国方言分布の成立過程における四つの層」(『国語学会昭和62年秋季大会要旨集』(岐阜大学)、昭和62・10)  
 同 (一九八八a)「△旋風▽の変遷における方言分布の四つの層——古代語彙の二系列——」(『フェリス女学院大学紀要』23、昭和63・3・1)  
 同 (一九八八b)「△庭▽の変遷における方言分布の四つの層」(『文化』51—3・4、昭和63・3・20)  
 同 (一九八九a)「『日本言語地図』三辺境分布・東西辺境分布Ⅱ語形図集」(『フェリス女学院大学紀要』24、平成1・3・1)  
 同 (一九八九b)「古代語彙における併存する同(類)義語——目・マナコ型の東西分布——」(『玉藻』24、平成1・3・10)  
 同 (一九八九c)「△太陽▽語彙考」(国語語彙史研究会編『国語語彙史の研究』十、平成1・12、明治書院)  
 同 (一九九〇)「上代における日本語の二つの層(上)——カゾフとヨムの場合——」(『玉藻』25、平成2・3)(尚、「下」の要点は、安部(一九九一)「数える」参照。)  
 同 (一九九一)「旋風」「太陽」「旋毛」「顔」「眉毛」「目」「頬」「唇」「舌」「唾」「涎」「顎」「親指」「人差指」「中指」「薬指」「小指」「数える」「庭」「畦」「土竜」(佐藤亮一監修『方言の読本』、平成3・8、小学館)(いずれも監修者の手が若干入っている。)  
 同 (一九九三予定稿)「古代語と方言——方言の分布と中央語の地理的広がり——」(古橋信孝・三浦佑之・森朝男編『古代文学講座』七、平成5予定、勉誠社、平成4・7原稿提出済)  
 井上史雄 (一九九〇)「標準語形の計量的性格と地理的分布パターン」(『言語研究』97、平成2・3)  
 江口泰生 (一九八七)「東国文献としての『天正狂言本』——動詞の音便形について——」(『文献探求』20、昭和62・9)  
 同 (一九八八)「『せおう』『かつぐ』等の表現をめぐって」(『国語学会昭和63年春季大会要旨集』(明治大学)、昭和63・5)  
 遠藤邦基 (一九七五)「促音表記固定の背景——なぜ『ツ』が用いられるようになったか——」(『岐阜大学国語国文学』11、昭

和50・2)

- 表 章 (一九五六) 『天正狂言本』解説(朝日古典全書『狂言集』下、昭和31・1、朝日新聞社)
- 加藤正信 (一九七三) 『国語史と言語地理学——『蜻蛉』を例として——』(『文学・語学』66、昭和48・3)
- 金井清光 (一九八二) 『天正狂言本の地域性』(『国語と国文学』59—8、昭和57・8)
- 小林 隆 (一九八三) 『顔』の語史』(『国語学』132、昭和58・3)
- 同 (一九八四) 『顎』を意味する語の歴史』(『文芸研究』105、昭和59・3)
- 同 (一九八九) 『方言における東西対立分布の史的傾向』(『奥村三雄教授退官記念国語学論叢』、平成1・6)
- 同 (一九九〇) 『方言形成史研究の展望と課題』(シンポジウム『日本人とその文化の地域性』原稿集、平成2・12)
- 同 (一九九一) 『方言東西対立分布成立パターンについての覚え書き』(国立国語研究所『国立国語研究所報告103』研究報告集12、平成3・3)
- 迫野虔徳 (一九七〇) 『方言史料としての古文書・古記録』(『方言研究の問題点』、昭和45・8、明治書院)
- 同 (一九七一) 『東国文献と言語指標——『天正狂言本』における『借りる』をめぐって——』(『北九州大学文学部紀要』7、昭和46・12)
- 同 (一九八二) 『方言語彙史』(『方言の語彙(講座日本語の語彙8)』、昭和57・4、明治書院)
- 同 (一九八七) 『促音・撥音の表記の動揺——『天正狂言本』の場合——』(『文学研究』84、昭和62・2)
- 佐藤亮一 (一九八六) 『地域社会の共通語化』(『講座方言学3』、昭和61・5、国書刊行会)
- 同監修 (一九九一) 『方言の読本』(平成3・8、小学館)
- 佐藤亮一 (一九九二) 『標準語・共通語の地理的背景』(『日本語学』11—6、平成4・5)
- 鈴木 博 (一九八二) 『語源追求の方法——カガシの場合——』(『国語国文』51—10、昭和57・10)
- 橘 正一 (一九三六) 『方言学概説』(昭和11・5、育英書院)
- 徳川宗賢 (一九七二) 『ことばの地理的伝播速度など』(『現代言語学』、昭和47・3、三省堂)
- 同編 (一九七九) 『日本の方言地図』(昭和54・3、中公新書)
- 徳川宗賢 (一九八三) 『日本言語地図』からみた方言の東西対立・概観』(『現代方言学の課題 第1巻 社会的研究篇』、昭和58・6)

蜂谷清人 (一九七七) 『狂言台本の国語学的研究』(昭和52・12、笠間書院)

同 (一九八五) 「中近世の文献に見る『背負う』『かつぐ』の分類をめぐって」(『国語語彙史の研究』六、昭和60・10、和泉書院)

広戸 惇 (一九八六) 『方言語彙の研究』(昭和61・2、風間書房)

福島邦道 (一九七二) 「トンボ(蜻蛉)の語史」(『シンポジウム』言語地理学と語史)、『日本方言研究会第十五回研究発表会発表原稿集』(岡山大学)、昭和47・10)

藤原与一 (一九六二) 『方言学』(昭和37・6、三省堂)

同 (一九八三) 『方言学原論』(昭和58・5、三省堂)

馬瀬良雄 (一九七七) 「東西両方言の対立」(『岩波講座日本語11 方言』、昭和52・11、岩波書店)

宮地敦子 (一九七九) 『身心語彙の史的研究』(昭和54・11、明治書院)

柳田征司 (一九七二) 「室町時代における口語語彙と文語語彙——アタマ・カシラ・カウベについて——」(『国語と国文学』49—11、昭和47・11)

付記 本稿二(2)に関して、佐藤亮一氏より御教授いただくところがあった。感謝申し上げます。

(一九九二・一二・二、稿了)

### 補注

(1) 本稿では、本論に入るに先立って、拙論「方言四層」について改めて紹介しておくことを割愛している。そのため、「方言四層」に関して初めて読まれる方にはやや理解しにくいものになってしまったが、本稿の次の箇所を順にたどってお読みいただければ、概略ながらその内容をつかんでいただけるかと思われる。尚、詳しくは、本稿と併せて、安部(一九八七、あるいは、一九八八b)を御参照いただければ幸いである。①一〇七頁二～八行目(「層」の考え方について)、②一〇七頁後三行目～一〇八頁一行目(対象としている伝播の中心地と分布範囲について)、③一二三頁二行目～一四行目(語彙の場合における四つの層について)、④一一六頁五行目～八行目(「古代全国層」「西日本層」「東日本層」までの変遷について)。⑤一〇三頁二行目～二〇行目(「近代全国層」について)。



(2)

校正時、江口泰生(一九八八)を発展的にまとめられた江口泰生『背負う』『担ぐ』の表現(『国語学』171、平成4・12)が出た。ここでは、本稿に関わるセオウ・オブウ・カツグなどの問題が広く取り上げられているが、いまは充分に取り入れることができない。東日本層の成立時期に関わる点のみ触れれば、セオウについて江口氏は東日本で成立した語であることを示唆されている(四九頁以下)。そうであるとすればカンダチに先行する語形となる。しかし、L A Jでオウは西日本に分布し東日本には全く分布しない。オウを使わない東日本で、突然にそのオウがしかも「背」との複合語形となつて登場するというのは、やや不自然ではなからうか。小林隆氏が東日本のシヨウは「西のセオウの再生形」(小林一九九一)とされるように、セオウ自体はやはり西日本語形と見るのが穏当と思われる。拙論における課題としては、その二三世紀頃には確認されるセオウが、いつ東日本に伝播したと確認できるかということになる。尚、日蓮の「シヲワセ」は、本稿の1で3として上げた点と関わり、音韻上の側面を考慮する必要がある問題と考える。詳しくは機会を改めたい。

(一九九三・一・七、校正時補記)